

<書評論文>

社会学理論における
身体観の二元論—自然主義的身体観と社会構築
主義的身体観を超えて—Chris Shilling, *The Body and Social
Theory*
(SAGE Publications, 1993)

倉島 哲

はじめに

本書の著者クリス・シリリングは、サザンブ
トン大学で社会学と社会政策学を担当してい
る。本稿は、彼の著書「身体と社会学理論」の
紹介とその批評の二部構成をとる。

1 シリリングの論点—身体観の二元論の分析
と現代社会の分析

シリリングは、本書には三つの目的があると
する。

第一に、現在までの社会学における身体の
位置づけの変化を扱うこと。

第二に、社会学的諸研究の身体観を評価す
ること。

第三に、後期近代社会における身体・アイ
デンティティ・死の関係を分析すること。

第一、第二の目的はシリリングの観点による
これまでの諸社会学理論の整理であり、第三の

目的はシリリング自身による現代社会分析であ
る。ここでは、これら二つの主題にそって本
書の内容を紹介する。1—1ではシリリングの提
案する社会学理論の分類のためのカテゴリーで
ある、自然主義的身体観と社会構築主義的身
体観にそってシリリングの論点をたどる。1—2
では従来の社会学において身体がいかに扱わ
れてきたかを俯瞰するが、本稿では身体観の
二元論を中心的に扱うために、これは補足的
に触れるにとどめる。1—3ではシリリング自身
のオリジナルな現代社会分析の枠組みを紹介
する。

1—1 二つの身体観

シリリングは、これまでの社会学理論を分類・
整理するためのカテゴリーとして、自然主義
的身体観と社会構築主義的身体観を提案す
る。

1—1—1 自然主義的身体観

自然主義的身体観(naturalistic views of
the body)とは、身体を生物学的存在とみな
し、それに基づいて社会の上部構造が構成さ
れるとみなす身体観である。これは、なんら
かの自然的本質を認める身体観と同義であ
る。

この概念は自然—社会の二元論、身体—精
神の二元論に結びついており、前者から後者
の方向へ社会関係・社会的身体構築のベク
トルを向かわせる。つまり、自然主義的身
体観とは自然的条件が一元的に社会関係を決定
し、身体的特性がそのまま精神のあり方を決
定するとみなすような身体観なのである。

最初に男女のジェンダーに関する自然主義
的身体観の歴史が、トーマス・ラクーアの議

論に従って示され、続けて性差別・人種差別を正当化するものとしての自然主義的身体観が論じられる。さらに、その生物学的に洗練された形としての社会生物学(sociobiology)が紹介される。

シリングの自然主義的身体観の定義を明確化するために、フェミニズムの文脈における自然主義的身体観の洗練された形態としてシリングが挙げているものを二点紹介しよう。

スージー・オルバックによれば、女性の身体は本来は痩せているが、男性支配の社会関係から生ずる身体の商品化により摂食障害に陥り、太ってしまう。女性が商品化に抗することを選択したとしても、それは意図的により価値の低い身体を獲得することによって、つまり太ることによって行われる。

ケイト・シェルニンによれば、女性の身体は本来は太っている状態が健康なのであるが、幼い頃から痩せなければならないというイデオロギーにさらされるため、不健康な痩身手術を余儀なくされるか、心身症に陥るかしてしまう。

シリングは、以上の二つの理論は社会関係が身体を変容させることに着目した点で自然主義的身体観を克服するかに見えるが、身体 of 自然な形状や自然な食欲・心身の状態を想定している点で、本質主義から自由ではないと考える。

1-1-2 社会構築主義的身体観

社会構築主義的身体観 (social constructionist views of the body) は、身体の意味や、極端な場合にはその存在さえも社会的現象とみなす身体観である。この身体観にしたがえば、身体は社会の自然的基礎ではなく、社会関係の結果生ずるものにすぎない。

これは、自然的本質を全く認めない身体観である。

この概念は、自然主義的身体観と同様に、自然—社会の二元論、身体—精神の二元論と結びついているが、それとは逆に、後者から前者の方向へと構築のベクトルが向かっている。つまり、社会的条件が一元的に自然的関係を決定し、精神がそのまま身体のあり方を決定するとみなす身体観なのである。

シリングによれば、四つの潮流が社会学における社会構築主義的身体観を形成した。それは、第一にメアリ・ダグラスの人類学、第二に社会史家の身体に関する記述、第三にフーコーの理論、第四にゴフマンの理論である。ここでは、フーコーとゴフマンの理論に限って紹介したい。両者の類似性は従来あまり指摘されることはなかったが、シリングの分類ではともに社会構築主義の範疇に入るのである。

フーコーの理論は、最もラジカルな社会構築主義的身体観である。伝統社会から近代社会への変化は、言説の対象・目的・範囲を変化させ、さらに、これらの変化が身体と権力の関係に二つの変化をもたらした。それは、第一に政府が以前よりはるかに強力に個人を操作するようになったことであり、第二に操作の手段が、身体の抑圧から心理的欲望の刺激によるものに変化したことである。

フーコーの理論では、身体は言説によって意味を付与されるのみならず、完全に言説のみによって構成されるとみなされるので、生物学的身体は全く考慮されない。そのうえ、近代社会において精神が言説による構築の対象となると、身体は精神の器としてしか扱われない。この意味で、フーコーの理論は自然主義的本質主義ではないかわりにその対極の「言説的本質主義」(discursive essen-

tialism) であるとシリリングは考える。

ゴフマンの場合はどうであろうか。彼の身体に対するアプローチには三つの特徴がある。第一に、身体は主体的個人の物質的所有物、つまり特定の自己を構築するための資源として扱われること。第二に、身体に付与される意味は、個人の直接的操作の範疇外にある「身体イデオムの共有された語彙」によって決定されること。身体イデオムは、身体から発せられる情報を分類・理解することを可能にすると同時に、この情報に基づいて人間を評価・序列化するために利用されるため、以上の二点は、身体が個人の所有物であり、かつ、社会によって定義されるという身体の二重の位置づけを示している。これは、ゴフマンのアプローチの第三の特徴、つまり身体が人間の個人的アイデンティティーと社会的アイデンティティーの関係を媒介するものとしてとらえられることにつながる。これは、特定の身体的パフォーマンスに付与された社会的意味が内面化され、自己のアイデンティティーを決定することによってなされる。

ゴフマンの理論においては生身の身体が中心的位置を占めるにもかかわらず、それらに対する意味づけはすべて身体イデオムによって外部からなされる。身体の意味が、究極的には精神がそれをいかに解釈するかにかかっているという点で、ゴフマンの身体観はフーコーのそれと同様、社会構築主義的であるとシリリングは考える。

1-2 社会学における身体

自然的身体さえも社会的に構築されたものであるという社会決定論がわれわれに馴染みやすいように、社会学は従来、社会構築主義

的身体観をとってきた。これは、どのような歴史的原因によるのであろうか。そして、本書のように身体の見直しをせまる議論は、どのような社会的文脈に位置づけられるのであろうか。身体観の二元論の議論を補足するためにこれらの点に触れておきたい。

1-2-1 古典的社会学における身体

シリリングによれば、古典的社会学は積極的に物理的、生物的身体を主題化して扱うことなく、かわりに身体が存在を当然の前提として身体化の問題を論じてきた。彼は、これを社会学における身体の「不在の存在」と形容し、その原因についてターナーの議論を引用して以下の四点を挙げている。

第一に、初期の社会学者は人類の歴史的進化ではなく、産業資本主義社会の間の共通性と、それらと伝統社会との間の差異に関心があったこと。第二に、社会学はシステムとしての産業資本主義社会の問題に関わってきたこと。第三に、社会学においては主体的行為に必要な能力は全体としての人間ではなく、意識または精神に求められたこと。第四に、以上の認識論的傾向の結果、身体を分類のシステムととらえる人類学とは異なり、社会学は主として精神的特徴によって人々を分類したこと。これはたとえば、マルクスが身体的特徴によってではなく、イデオロギーという精神的特徴によって社会の階層化を説明したことに現れている。

ターナーの論点にシリリングはあらたに二点を追加する。第五に、「脱身体化」(disembodied)された、抽象的・認識的探究が社会学の方法論であったこと。これはたとえばデュルケムが、社会的事実を把握できるのは身体的な感情や偏見から自由な専門の社会学者で

ある、と考えたことから見て取れる。第六に、「社会学創生の父」はみな男性であったこと。もし女性であったならば、妊娠・出産時の身体的危機や、産業革命期の乳児死亡率の高さ等のために、より身体が考慮されていたかもしれないとシリングは考える。彼はここで、知識と身体の不可分の連関を認識することは、自然主義的身体観に陥ることとは異なるとつけ加えている。

もっとも、マルクスとエンゲルスの階級間の関係が身体化されるという理論や、ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理の身体化の理論を見ると明らかなように、古典的社会学は身体を主題的に扱わなかったものの、身体を全く無視したわけではない、とシリングは断る。

1—2—2 現代における身体の再認識

現代社会において身体に対する社会的関心が高まるに伴い、社会学においても身体を主題的に扱う論者が増加した。それらはたとえばブルデュー、エリアス、上述のオルバック、シェルニン、さらにボブ・コネル、ピーター・フロインド等である。

身体に対する社会的関心が高まった第一の理由は、60年代の「第二波」のフェミニズムが、選択的妊娠や中絶の問題を政治的関心の対象にし、男性の支配下にある女性の身体を取り戻す運動の端緒となったことである。第二に、西洋諸国が高齢化し、その対応のために政府が身体への関心を高めたこと、さらに、衰える身体に対する高齢者自身の意識が問題になってきたことが挙げられる。第三に、産業資本主義社会から大衆消費社会への移行に伴い、コンシューマー・カルチャーの中で「展示される身体」としての身体が中心

的な位置を占めるようになったことである。シリングはこのような自己アイデンティティーを「身体的アイデンティティー」と呼んでいる。第四に、遺伝子操作、臓器移植、美容整形、科学的トレーニング等のテクノロジーの進歩が、身体の定義を不明瞭にしたことである。

第三、第四の理由の意味することは、身体がアイデンティティーの中心になることにより、人々の身体に対する関心が高まりつつあるにもかかわらず、身体そのものの定義がますます不確実になっているということである。この点は、シリング自身による現代社会分析で精密化される。

1—3 シリング自身による現代社会分析

本書の第二の主題である後期近代社会の分析では、シリングは身体・アイデンティティー・死の問題を中心とした分析を行う。後期近代社会における死と身体的重要性を認識するための三つのアプローチが提示される。ピーター・バーガーの理論、アンソニー・ギデンズの近代に関する理論、そしてブルデューとエリアスの理論である。

第一のアプローチは、バーガーに見いだせる。彼によれば、人間は生きのびるために行為し、さらに自らとその行為を意味づけることを余儀なくされる。だが、近代社会では宗教の占める領域が縮小したので、社会が共有された意味システムを提供することが困難になっている。

バーガーの理論は、文化的・歴史的状況に関係なく人間は常に意味を求める心理学的必要性に駆られて行為する、という普遍的前提に立っているために、自然主義的である。

ギデンズは、後期近代社会における伝統社

会との断絶が、人間から伝統社会の確実な世界観とそれに基づくアイデンティティーを奪い去ってしまったとする。そのため、近代人にとって自己の身体がアイデンティティーの最後の根拠となる。しかし、現代代社会においては身体そのものも自然によって与えられたものではなく、技術的に操作可能であるため、身体を意のままに操作する手段は存在するが、身体の定義や、また何を目的として身体を操作すればよいかに確信が持てない状況が生ずる。

ギデンズの分析の大部分は特殊近代的な事態の説明にあるとはいえ、存在論的な安定の必要性を前提としている点でバーガーの理論と同様に自然主義的であるとシリングは評する。

シリングは、バーガーとギデンズは死の一般的な存在論の問題を強調するが、それが人々の間で異なることに関しては無関心であると考えている。バーガーとギデンズの死の分析を補完するものとしてシリングが考えるのは、人間の身体に対する関わりかたの共時的差異・歴史的変遷に着目しているブルデューとエリアスの理論である。

ブルデューは近代における身体の多様な商品化を分析した。社会システムはある種類の身体に価値を付与するような、多様な社会的場を含む。このような状況下では、人間のアイデンティティーが身体と結びつけられる傾向が生ずる。価値が付与されるのは生きている身体であるため、死に近づくことである老化は多くの場合身体の象徴的価値の低下をもたらす。しかし、死に対する不安は人によって異なる。つまり、象徴資本の源泉としての身体にどのくらいの時間と努力を投資したかによって、死に対する態度は異なると考えられるのである。

エリアスの分析は身体の象徴的価値の歴史的な変化を扱っている。近代社会では社会的現象としての身体が強調される反面、自然的機能は隠されるようになった（社会化）。しかし、人間の身体は社会的存在であると同時に生物学的存在でもあるという事実、つまり死という事実から逃れることはできない。さらに、身体が個人と個人、そして個人と外界を隔てる障壁として経験されるようになったため（個人化）、人間は自己の身体の死を憂慮しつつ、たった一人で死に直面することをせまられるようになったのである。

2 批評—本書の二つの主題の不整合

ここでは、はじめに本書の第一の主題である身体観の二元論という観点を評する。つぎに、身体観の二元論の克服という観点から見たときの第二の主題、つまりシリングによる現代社会分析の問題点を指摘したい。

2-1 第一の主題—身体観の二元論の意義

身体を中心として多くの社会理論を一貫的に比較可能にするという点で、身体観の二元論は有効な理論的視座である。後述するように、身体観の二元論の枠組みに従えば、シリング自身による現代社会分析の枠組みさえも社会構築主義であるという批判を免れえないほど、身体観の二元論の枠組みは一般的な適用可能性を有するのである。

身体観の二元論は、日常的領域から科学的領域まで広範囲に行き渡る（身体—精神、自然—文化などの）二元論の、社会理論の領域における表出形態であると考えらるることにより、その第二の長所が明らかになる。つまり、シリングの理論は抽象的・思弁的になり

がちな心身問題を、具体的な社会理論のレベルで考察することを可能にするのである。

2-2 第二の主題—シリングの方法論による 現代社会分析の問題点

シリングは、第一の主題である方法論的問題の分析において身体観の二元論という問題を提起したのち、第二の主題である現代社会分析に移行し、身体的アイデンティティーと死を中心とした分析枠組みを提案する。この枠組みそれ自体は、現代社会の理解に有効である。しかし、これを第一の主題との関連において検討するなら、身体観の二元論の克服という目的には適当ではないという結論にたどり着かざるをえない。

第一の主題でシリングが把握しようとしたのはどのような経験であるかは、一例として日常の食事の経験を検討することによって明らかになる。外で食事を終えて「おいしかった」と言ったとき、誰かに「なぜおいしかったのか」と尋ねられたとする。このとき、どのように答えるのが正確であろうか。「今日は特別に体調も良く、空腹だったから」という答えは、昨日読んだ『おいしい店ガイド』の影響を無視することになる。反対に、「『おいしい店ガイド』にこの店が掲載されていたから、おいしく感じたのだ」という答えは、風邪を引いたときには何を食べてもまずく感じられる経験を忘れている。ここで、「どこまでが生物的原因によるもので、どこまでが社会的原因によるのかはつきりしろ」と問い詰められても、答えに窮するほかない。経験までの過程はブラックボックスであり、結果としての「おいしい」という感覚のみがわれわれに与えられるのであるから。一方では空腹度・体調、他方では食事の

時の雰囲気・食物に関する言説などの要因が交錯し、結果として「経験としての食事」が成立するのである。

このようなプロセスが存在するのは、直接経験の場合だけである。他方、間接経験の場合は言説だけが一元的に経験を決定する。たとえば、実際に自分で食事に行くことなく『おいしい店ガイド』に掲載されていた情報をそのまま受け売りする人が、「なぜおいしかったのか」と聞かれたとき、最も正確な答えは「『おいしい店ガイド』にこの店が掲載されていたから」である。

直接経験における生物的身体と社会的言説との相互浸透の把握こそ、シリングが目指したものであるということは、身体観の二元論の説明の際の各論者に対する批判から明らかである^{*1}。

食事の経験は直接経験であるため、それを中心とした分析は生物的身体と社会的言説との相互浸透を視野に入れることができる。しかし、死は直接経験としてではなく、間接経験としてのみ存在する。たとえ、「死の瞬間の直接経験」が存在すると仮定しても、シリングは死という言葉を「死への不安」という文脈で用いているので、死における生物的身体の社会的言説への影響が問題になることはありえない。心理的「不安」が直接経験されるとき、不安の内容たる「死」は間接経験にとどまらざるをえないのである^{*2}。

つまり、死は生物学的言説の領域か社会的言説の領域かのいずれかにしか存在せず^{*3}、いずれの場合にも社会的言説によってのみ把握されるのである。生物学的な死の定義はさまざまであり、社会的な死の定義もさまざまであるが、経験によってそれらを結びつけることが不可能であるからこそ脳死が問題になるのである。

シリングが問題にしているのが身体的アイデンティティーであったとしても、それが死に対する不安へと方向づけられている以上、そのアイデンティティーは一元的な社会構築主義の枠組みで十分に把握可能である。事実、社会的言説によって身体に「死すべきもの」という意味が付与され、精神がその言説にそのまま従って身体に働きかける（たとえば、死を延期するために煙草をやめ、減量する）という理論構成には、「身体の意味が、究極的には精神がそれをいかに解釈するかにかかっている」という社会構築主義批判がそのまま妥当する^{*4}。

現代社会分析は、バーガー、ギデンズ、ブルデュー、エリアスの理論を独自の方法で相互に明確に関連付けている点でシリング自身のオリジナリティのあふれるものであるが、以上に述べた理由により身体観の二元論の克服には不向きであり、ややもすれば克服の可能性をシリング自身が閉ざしてしまうことになりかねない。

2—3 本書の意義

以上のように、本書には内容的にかなり隔たった二つの主題が存在する。シリングは現代社会の特徴を浮き彫りにするために身体・アイデンティティー・死を中心とした分析枠組みを設定したと思われるが、それは、身体観の二元論を克服することにはならない。現代社会分析に有効な方法論的視座が身体観の二元論を見えなくしてしまうということは、もはや意識されなくなるほどに二元論が現代社会に深く浸透していることを示唆する。

本書は身体観の二元論という独自の視点から多くの理論を批判しているが、シリング自

身による決定的な代案は提出されず、彼のオリジナルな理論は現代社会分析の枠組みの提示にすぎない^{*5}。しかし、問題に「身体観の二元論」という名前を与え、その所在を明らかにすることは問題解決の第一歩であり、ここにこそ本書の意義は存する。

* 1 一例を挙げれば、シリングはブライアン・ターナーの理論を批判するさいに彼の理論は本質的に機能主義的であるとし、「生きられた身体」(lived body)の把握が不可能であるとする。また、スージー・オルバックとケイト・シュルニンの理論の評価のさいにも、これらの理論は生物学と社会学の相互浸透が理論化されている点で評価に値する、としている。

* 2 死は間接経験としてしか存在しないが、不安は直接経験たりうるので、不安の経験されるプロセスには生物的身体と社会的言説との相互浸透がみられる。しかし、不安は流言・デマのような社会的言説によるところが大きいように思われる。とりわけ死に対する不安の場合は、その内容の直接経験がありえないだけに社会的言説が決定的役割を果たす。シリングの理論が社会構築主義的たらざるをえないゆえんである。

* 3 もっとも、これは生物学と社会学の相互浸透を問題にした場合であって、視点を変えることにより宗教的言説、政治的言説などの領域にも死は存在すると考えることは可能である。肝心なのは、死は言説としてしか存在しないという一点である。

* 4 身体的アイデンティティーが食事という直接経験へと方向づけられていた場合は、「あの店はおいしい」という言説にもかかわらず実際に行ってみたらまずかった、ということが起こりうるので、精神が社会的言説にそのまま従うとはかぎらない。つまり、直接経験の本源的な不確定性は、死という間接経験の場合に見られるような悲観的決定論を許さないものである。

* 5 筆者としては、現代社会分析よりも、本書によって指摘された身体観の二元論そのものに関心がある。二元論に陥らない理論的枠組みの模索は、二元論が顕在化・潜在化する

ケース（たとえばメディアによって直接経験と間接経験の境界があいまいになっている現代社会）や、二元論では把握不可能であるために他の認識枠組みを要求するようなケース（たとえば社会的言説に還元されえないような種類の身体運動）を考察することがその方法となるであろう。